

法華宗の 教えを語る

大平宏龍・株橋祐史

『無上道』編集部編

東方出版

法華宗の教えを語る

大平宏龍・株橋祐史

『無上道』編集部編

東方出版

序にかえて

大平 宏龍

建長五年（一二五三）四月二十八日、清澄の旭ヶ森で東天に昇る太陽に向かって日蓮大聖人（一二二二～一二八二）は、南無妙法蓮華經と唱えられたと伝えられる。この日、正午頃から道善坊の持仏堂で、法華經こそ成仏の教えであると説法された。それで宗祖門下では、この日を立教開宗の時とするのが一般的である。

ところで、教学理論が宗祖の著述等（御遺文・御書などと称する）に、どう示されているかを年代を追って厳密に考察する時、文永十年（一二七三）四月二十五日撰述の『観心本尊抄』において、はじめてその真意が発表されたとする思想的観点にたてば、『本尊抄』撰述の日を立教開宗とする考えも出てくるであろう。

しかし、本書の対談の中でもふれているように、私共は信心の立場において、宗祖を上行菩薩が人間の世界に教主釈尊の御命令で仏法を弘めるべく出現された方、とみるのである。この立場では、宗祖の内証は不変であるから、建長五年をこの娑婆世界（今、私たちが住む地球）における立教開宗の時

と考へて一向にさしつかえない。したがって、私は、来る平成十四年（二〇〇二）を立教開宗七百五十年として迎へたいと考へているが、同時に、『本尊抄』選述七百三十年でもあり、しかも四月の二十五日と二十八日と、日も近接しているのは、興味深い符合であると言わねばならない。

法華宗（本門流）の布教機関誌『無上道』は、開宗七百五十年に向けて種々の誌面刷新を試みているが、此の度の対談もその一環であるらしい。私としては、そのような企画の適任者ではないし、第一、話が下手で、過去にも苦い思い出があるので極力御断りした。しかし、編集者の熱意に根負けして、また後悔を残すこととなった。その上、今度はこれを書物としたいという。有難いことではあるが、私なその関係したことがそんな価値もないのに、という思いが正直な所である。それなのにこの企画を受けたのは、別に一つの感懐が、ふと頭をよぎったためであつた。

それは、今述べた『本尊抄』選述七百三十年に関して、株橋日涌上人のことが思い出されたからである。周知のごとく戦前・戦中にかけて、日蓮門下は当時日本を覆った国家主義を背景に、宗祖の曼荼羅本尊や御遺文に不敬・不穩当の箇所ありとして、国家より弾圧を受け、御本尊を更改したり、御遺文の一部を削除する動きが一般的であつたが、特に法華宗は、宗内出版物の『教義綱要』を問題とされて、役職にあつた六師が検挙され、のち苅谷日任・株橋諦秀（日涌）の両師が起訴されて、裁判で争うことになった。

結果として、法華宗のみは、御本尊・御遺文を全く損することなく、そのままに死守したのである。それには不思議な支援者の出現もあつたが、何より苅谷・株橋両上人の教学研鑽に基づく、時代思潮

との対決があったのである。この稀有な御経験をふまえて、両上人には共にライフワークの大冊があるが、『本尊抄』については、株橋日涌上人の『観心本尊鈔講義』は質量共に『本尊抄』研鑽七百三十年の金字塔と言えよう。

しかし、それは、残念ながら末尾に近い所で、上人の示寂により未完となった。御遷化の数時間前まで執筆されていたという、そのことに私はいつも胸を衝かれる。

上人亡きあとの大著は、遺弟株橋祐史・隆真両師等と共に私も加わって、ようやく刊行できたのであった。

株橋日涌上人はかつて『中外日報』で、「宗学の向上こそ宗勢の発展であり、民衆の中に仏法が生きてゆく所以である」（昭和五十八年一月五日号）と言われている。上人の御法嗣祐史師と、このような対談をすることも、少しは恩師の御意に添う所があるかと思っただのである。

ところで、先生が御存命ならば、開宗七百五十年をどのように語られたであろうか。すべてに厳格であられた日涌上人のことである。私などの話には、必ず靈山浄土で「アホが！」とお叱りではないか。私としては、その恐れを抱きつつも、七百年以上も前の日蓮大聖人の御教えが、古くさく、カビのはえたものではなく、むしろ現代にとって益々有益なものであることを、何とかして読者諸氏と一緒に考え、伝えたい、その一心なのであり、その意を汲んで下さればそれで十二分なのである。

も
く
じ

第一章 私たち法華宗信徒は、何に對して手を合わせているのか…………… II

「本尊」とは仏教的な考え方 13

「法」に帰依するということ 15

仏教は南無妙法 17

法とは何か 18

天台の書物に「本尊」という言葉がない理由 19

日蓮大聖人の本尊觀の特徴 21

「本尊」の教義的解釈 25

仏教とキリスト教の基本的な相違点 26

日本人は無信仰の民族ではない 29

日本仏教（浄土系）と日蓮大聖人の本尊觀の相違 31

南無妙法蓮華經と唱えて聞かす 32

法華宗と日蓮宗の本尊の違い 34

大曼荼羅の世界 37

南無に南無する 40

南無妙法蓮華経はありがたいもの 42

お題目に生きる 43

第二章 「お経を読む」ということ…………… 47

「お経を読む」ことの考え方 49

現代人のお経への意識 51

お題目と読誦 53

法華経を読誦するということ 55

漢訳仏典を読む 57

法華宗の「儀式」 59

「お経を読む」こと目的 62

法華経は民衆仏教 65

法華経の精神 68

日蓮大聖人の法華経観 71

経力について 73

第三章 日蓮大聖人について……………81

日蓮大聖人との出会い 83

日蓮大聖人はどんな存在 85

上行日蓮と人間日蓮 86

日蓮大聖人研究の進展 89

日隆聖人の視点 91

日蓮大聖人に対する評価 93

日蓮大聖人の容姿と気質 97

太陽の如き日蓮大聖人 98

日蓮大聖人の心の大きさ 102

日蓮大聖人の御手紙 105

菩薩の姿 107

日蓮大聖人と『法華経』 109

成仏の種

112

教相判釈について	114
釈尊出世の本懐	117
日蓮大聖人と上行菩薩	118
日蓮大聖人は上行菩薩の「再誕」ではない	122
「末法」という時を自覚する大切さ	123
開宗七百五十年と日蓮大聖人	128
「七五〇」とは	132
日隆聖人の日蓮大聖人観	135
共生と折伏は矛盾しない	138
あとがき	143
株橋祐史	
編集後記	145
日種崇人	

装幀 濱崎実幸

第一章

私たち法華宗信徒は、何に対して手を合わせているのか

南無妙法蓮華經を本尊とする法華宗の教えについて、
日本のみならず世界宗教の中において、その意義を語る。

「本尊」とは仏教的な考え方

株橋 私たち法華宗信徒は、日蓮大聖人の教えから「本尊」という言葉をよく口にしますが、一般的には「本尊」とはどういったものと言えま
すか。

大平 ふつうは礼拝の対象となる仏・菩薩などを意味します。ごく一般的な意味で言えば、キリスト教等においても「神」を「本尊」と言えるかという問いがですが、仏教的な意味、つまり香華なんかを供養する、そういう対象としての「本尊」ではありません。また、我々の本仏＊はじまつしよ釈尊そんという人的本尊にしても、教主であり、しかも修行のお手本といえます。キリスト教とかイスラム教の神はまったくちがいます。要するに神が人間を創ったとする基本思想は、自分の成仏の可能性を活性化して仏に近づいていくという仏教の思想とは異なるものです。だからそういう意味では、キリスト教とかイスラム教について、「本尊」という言葉を用いることではないでしょう。それから神道でも「本尊」という言葉を使わないでしょう。「ご神体」といいます。だからある意味では、「本尊」という言葉自体は仏教的な概念だということが言えるのではないでしょう

本仏釈尊 根本本体の仏のこと。
インド出現の釈尊はこの本仏より
垂迹した仏である。法華経寿命品
に説示される。

うか。

株橋 よく耳にする言葉に「鰯いわしの頭も信心から」があります。何かに手を合わす対象を作って、そこに信を入れるとか願いをかけるという行為、つまり自然崇拜というよりも、形になって現れたものを拜むという方が拜みやすいといえますかね。これは日本人の特徴的なものかどうか分かりませんけれど。

太平 それは日本だけでなく、おそらく人間の傾向として世界共通にあるんじゃないかと思います。というのは、先日ローマ法王が、過去に犯した罪、例えばかつての魔女狩りや、異教徒を弾圧し殺したことに對して、反省し懺悔ざんげしたことが、新聞に写真と共に載っていましたね。そこには、法王が十字架に架かったキリストの像の足のところに額を当てて許しを請うている写真がありました。キリスト教というのは偶像崇拜おぐうさうはいを否定する教義ですが、あれは偶像崇拜といえます。まさしくあれは我々から見ると、そういう像に対して懺悔しているわけですから。形に現れているだけとの反論もあるでしょうが、仏教・キリスト教に限らず、何か形のあるものを提示しないと、人として宗教的な心情に対して物足りないということでしょう。何か形のあるものを拜むということにおい

偶像崇拜 神仏を具象するものとして作られた像、絵画等を、宗教的な象徴として崇拜、尊重すること。

ては、人間の傾向として世界に共通しているといえます。宗祖が十界の曼荼羅まんだらを図顕ずけんされた意味を拝すべきでしょう。

「法」に皈依すること

株橋 「本尊」という言い方をするのは仏教の特徴なんですね。そこに手を合わせて自分の内面を高めるっていうんですか、功德くどくによって向上しようとする、そういう姿は仏教の特徴の一つとってかまいませんね。大平 そうだと思います。それは要するに仏教という教えそのものの特徴といえます。つまり仏教では、創造神や唯一神というのは説かないでしょう。キリスト教とかイスラム教は図式的に言えば「最初に神ありき」で、神様という世界の創造主を先に立てて、そこからいろんな教説を引き出す。仏教の場合はそうではなくて、やっぱり「ダルマ」(法)でしょう。「最初にダルマありき」つまり「妙法」なんじゃないですか。だから「法」というものが先にあるわけで、そういう意味で基本的な教えというものの構造がまるっきり違う所が仏教の大きな特徴のように思います。

株橋 「法」というものが眼前にあるということとは理解できますが、釈

曼荼羅 広くは仏の最高の悟りの本質を得ることであると解釈される。また壇、道場、輪円具足、功德聚とも訳される。

尊のインド在世当時、釈尊ご自身は何かに対して礼拝されていたという事実はあったんでしょうか。

大平 『涅槃經』*によれば、インドの釈尊のご入滅が近い場面で、阿難*が「師の入滅後は一体何に頼っていいのか」と悩んだ時に、釈尊は「何を言っているのか、私のにぎりこぶしはない」とおっしゃった。

つまり、すべて明したではないかと。しかし、改めて釈尊が何を説こうとされたのかというと、まず、「自分を頼りにし、自分を灯火として生きなさい」と。その次は「法なんだ」と。「法を抛り所とし、法を灯火として生きなさい」。これがお前の最終的な抛り所だ」と。いわゆる漢訳で言う「自灯明・法灯明」*の説法のところ*です。この説法から考えれば、インドの釈尊自身は「法」というものに対して、帰依というか一体となったというか、それが釈尊の「本尊」といえば「本尊」ではないかなと思います。

株橋 私たち法華宗信徒ですと、本仏釈尊は何を拝まれたと尋ねられると、「南無妙法蓮華經」を拝まれた、とすぐさま考えるわけですね。この考え方は、「法」を抛り所としている点において、インドの釈尊の場合も同じ仏教の大きな柱、つまり根底に流れている大きな思想と考えら

涅槃經 釈尊の入滅を叙述し、あるいはその意義を問う經典類の総称。

阿難 インド釈尊の十大弟子の一人。「多聞第一」と呼ばれる。

れますね。

仏教は南無妙法

大平 今までの関連から、仏教の特色はどこにあるんだろうと考えてみましょう。仏陀についてみると大乘仏教の流れの中で釈尊観というものが色々な変化をして、仏身論（釈尊がどういうお方であつたかということの究明）について様々な解釈が生まれています。真理を中心として観るか、やはり衆生に対する教化を中心に観るのか、あるいは釈尊ご自身の修行、それから衆生に対する教化を中心に観るか、というように多面的に論じられて来ています。例えば、真言宗の大日法身だいにちほうじんみたいな解釈を取り上げてみても、それは真理身であって、そこでは究極の仏身であると主張するけれども、だからといって地球を創ったとか宇宙を創ったとか、そういう神格を付与されるわけではないでしょう。あくまで仏教の基本線というのは守られていて、いわゆる唯一神教であるキリスト教とかイスラム教の教えの立て方と仏教とは完全に違います。

もっと言えば、仏教だけが他の世界宗教と比較して非常に特殊な構造を持っているといえると思うんですね。だから、昔、田村芳朗先生とそ

田村芳朗（一九二一～一九八九）
東京大学卒。文学博士。東洋大・
東大・立正大教授。興隆学林でも
教鞭をとる。

んなことを話していた時に、田村先生は「仏教は真理信仰だから」と、おっしゃっていました。これは会話の中で言われたことであって、講義中に厳密に述べられたということじゃないけれども。真理信仰とは、具體的には「法」というものを中心と観るということです。

法とは何か

——「法」というのは「教え」と理解していいですか。

太平 まあ、訳が難しい言葉ですね。原語では「ダルマ」とか「ダンマ」になります。

株橋 難しいですね。「教え」と理解されてくるのは、民衆を相手にしていった時に「教え」という形になるんじゃないかと思いますが。

大平 色んな意味を含んで一言ではいえませんが。

株橋 そうですね。私なりの理解では、すべてのものが生かされている原理的なものと考えていますが。

大平 まあそういった「真理」といえる意義はあると思いますね。一つは「法理」というようなものも。それから、「諸法実相」と考えれば現象的存在、「もの」「心」といえます。それから教法、「教え」とも解釈

諸法実相
すべての事物のありの
ままの姿。

できます。もっと碎いて、日々の生活の中でそれに従って生きていかなければならない正しい生き方、というような意味でも使われています。さらに、法則・属性・徳・因などの意義もあるようです。「ダルマ」とは、非常に意味あいの深いものを多く含む言葉ですね。中国ではそれを「法」と訳したのだけれども、「法」といえば日本では「法律」の「法」を思い出すから、そっちの方のイメージが強くなりますが、「法律」とは、社会生活上で従っていかなければならない約束、つまり社会上の取り決めごとというものですけれども、ダルマにはもっと一般的な意味で、人間が人間として生きていく上で従っていかなければならない「生き方」のようなものをも意味することもあると理解すべきでしょう。

天台の書物に「本尊」という言葉がない理由

株橋　ところで、「本尊」ということを非常に問題とされたのは日蓮大聖人だったというのが一般論としてありますが、日蓮大聖人は『法華経』を読まれて「本尊」に着目されたことを考えますと、同様に『法華経』を学した天台大師^{*}の書物には「本尊」というのが出てこないわけです。両者には宗教観の違いがあるんでしょうか。大きな問題だと思いますが。

天台大師（五三八～五九七）
中国仏教史において天台教義を樹立した天台宗の開祖。智顗。智者大師。一般に天台大師と呼ばれた。

大平 大きな問題だと思えます。中国の天台智者大師口述の書物の『摩訶止観』^{かしかん}には、「止観」即ち「禪」の修行法が説かれていますね。その一念三千観とは、自分の心に三千を悟ることです。自分の心に「諸法実相」を悟る修行ですから、本尊は色々になるのです。そこで日蓮大聖人がそうですし日隆聖人もそうですけど、天台宗を批判するときに「本尊」が非常にまちまちである、とずいぶん批判されますよね。そういうことで、拜む対象は対象としてあるけれども、自分の心の中に真理を悟ることが大事なんだと。だから対象は、極端に言えば何でもいいという考えが成り立ちます。しかし、日蓮大聖人の場合は『法華経』を中心に観られるわけで、『法華経』は、色んな事柄が統一というか根本のものを求めていくよう説かれています。具体的に言えば、仏さまでも本仏・釈尊に統合されますし、教え、修行者も、修行の方法も、それは一仏乗^{いちぶつじょう}と言われます。そのように、根本的なものが示されるお経が『法華経』だと言っていると思うんですけども、その意味において礼拝の対象も一番根本のものが定まってくるわけですね。そうすると、自然にそれを拜むということが決まって来るので「本尊」が大切になるのです。

株橋 『法華経』を同じように読んでも、『法華経』観の違いがあるん

摩訶止観 天台三大部（法華文句・法華玄義）の一つで、法華による修行法を説く。

一仏乗 一切衆生は本来より菩薩であるという説。唯一・統一（または同一）の意味を持つ。

ですよね。『法華經』自体が要請しているのは、やはり「法」に對する
歸依っていう形なんでしょうか。

太平 本仏釈尊の存在を通しての「法」に對する歸依でしょう。「法」といっても、根本の教法としての南無妙法蓮華經、つまり總名そうみょうが本尊であると我々法華宗では解釈しますが、他の日蓮門下の大部分は釈尊本尊を立てます。つまり、釈尊に中心を置いてるわけで、その場合には南無妙法蓮華經というものも釈尊と同列に置くという考えでしょう。あるいは、南無妙法蓮華經は一念三千を悟る代替行為だいたいこういと位置付けて、我々法華宗のように南無妙法蓮華經を一番上に置いて考えるということではありません。また、富士門流の日蓮正宗などは日蓮本仏論を立てるのですけども、この考え方も法華宗とは違います。というより、日蓮大聖人ご自身のお考えとは違います。

日蓮大聖人の本尊觀の特徴

株橋 日蓮大聖人が特に「本尊」に注意をされたのは、ご自身の問題もありましようが、常に衆生教化という觀點が非常に強く働いていたと思います。つまり、衆生が幸福になるまで、衆生が成仏するためには

「本尊」というのは必要欠くべからざるものであって、もうこれがないことには成仏できないという必要性を普遍化されていったととらえてよろしいんでしょうか。

大平 日蓮大聖人は、全仏教の中から『法華経』というものに依らなければならぬという観点に立たれた。だから、『法華経』のお題目に依らなければ末法の衆生は救われないんだという強い信念の一つの表現が、「本尊」ということを非常に強く言われたのかもしれないと思います。

つまり、日蓮大聖人当時、他宗派の人たちが「本尊・本尊」と説いても、その人たちが言う「本尊」の内容が問題で、教主釈尊の出世の本懐ほんかくである『法華経』の信心、つまり自分は一体何にすべてを帰依すべきかとい



(大平)



(株橋)

うと、それは唯一お題目なんだ、私共の信は頼りなくとも正しい「本尊」を拜むことが大事なんだ、と主張されたかったと思います。そういうところから、当時一般に使用されていた「本尊」という言葉を取り入れて、「本尊」が大事なんだという言い方をされたんだと思います。

株橋 やはりそうですか。そこで元々は密教の言葉であった「本尊」は、日蓮大聖人によってもう一度その概念が再規定されたといえますね。

太平 そういうことじゃないかと思えますね。

株橋 まさしく「本尊」の必要性和意義を明確にされた人、それが日蓮大聖人。

太平 そう理解してもよいでしょう。それで一般に言われていることに

も触れてみましょう。真言宗ではまず、「本尊」を「有相^{うさう}」と「無相^{むさう}」に分けています。まず「有相」の「本尊」とは、大日如来^{*}であったり観音さんであったりしますが、その基本は大日如来で、形として現れている自己と対象になる仏・菩薩を拜むという解釈が一つ。もう一つの考え方は、自分自身は宿世から特定の仏・菩薩からの縁があり、その仏・菩薩がいつも自分を守護している。だからそれを拜まなきゃならないということです。曼荼羅に華を投げて、自分と関係の深い仏様を見出すわけでしょう。例えば不動明王^{*}の所に華が落ちたならば、不動明王が自分にとって「本尊」だとする見方が一つあるわけです。そして「無相」の「本尊」というのは、自分自身の心を「本尊」と考える見解です。また、浄土系では阿弥陀仏、あるいは弥陀三尊を「本尊」とし、浄土真宗では南無阿弥陀仏の名号を「本尊」とすることがあります。これに対して日蓮大聖人の場合は、すべての人たちが末法という時に拜まなきゃならない「本尊」は唯一、南無妙法蓮華経であり、それが仏教の示すところ、つまり教主釈尊の本意であると主張されました。それを十界曼荼羅で示されたので、ここに日蓮大聖人の本尊観の特徴があると思います。

大日如来 密教の曼荼羅の中心に配置される仏。

不動明王 五大明王・八大明王の一つで、その主尊。大日如来が、すべての悪魔・煩惱を降伏させるために化現した教令輪身で、忿怒の相をとっている。

「本尊」の教義的解釈

太平 ここまでの話を一応整理する意味でも、「本尊」という言葉の教義的解釈を述べておきます。一般的に「本尊」とは、「本来尊嚴」の略称と解釈されていますが、株橋日涌先生著述の『本尊鈔講義』では「根本尊崇」、それから「本有の尊形」と定義されています。ですから、法華宗ではこの「根本尊崇」と「本有の尊形」という二つの意義を採ります。「根本尊崇」とは「本として尊ぶ」ということで、修行の根本になる、それから修行の根本として拝むという意味が「根本尊崇」。「本有の尊形」とは「本より尊し」という意味で、仏・菩薩の身心の全体が南無妙法蓮華經と一にして無始本有の尊形である、と説明されており、要するに南無妙法蓮華經を唱えるという修行によって、本来の尊い姿が出るというのが「本有の尊形」。この二つの意味をもって、法華宗では「本尊」の語義と解釈します。この二つの意味をもって日蓮大聖人は「本尊」というものを主張された、とこういうことになると思います。

株橋日涌（一九〇九—一九八四）
昭和三年学林卒業以来学林教授、
学監、学林長等を歴任。大本山本
興寺第百二十六世。昭和法難に察
し、刈谷日任上人と共に御本尊・
御遺文等を死守。現代法華宗教学
の確立者。主著は『観心本尊鈔講
義』。

身心 肉体と精神。

仏教とキリスト教の基本的な相違点

大平 一応は、本尊とは礼拝の対象とするのが一般的な意味と理解しておいて、これよりは先に触れた仏教とキリスト教の基本的な相違点を考えてみましょう。仏教の基本的線はダルマ（法）が先にあつて、それを悟つた、あるいはめざめた人がブッダ（仏）であるといふところにあります。修行の過程において法行観・信行観の違ひはあつても、法と一体となつたところに仏道の完成を観る。つまり、仏道を修行すれば誰でも仏になれるというのが仏教の立場です。しかし、キリスト教とかイスラム教では、生を受けたときからすでに神によつてすべてが決定されています。たとえば、地獄に堕ちる人、天国に行ける人は、「予定説」といふて決まつていふと言います。犬などの動物は天国には行けないのです。こうしたことから分かるように、仏教とキリスト教では教えの基本線がまったく違つています。だから、キリスト教などでは我々が用いていふ本尊という概念はなじまない考え方だと思ひます。従つて、あくまでも本尊とは仏教的な言葉と理解すべきでしょう。

株橋 もつと碎いて考えてみれば、仏教者が拝むのとキリスト教者が拝

法行観 真理を觀照することによつて悟りを得て成仏を期する修行。

信行観 積尊の教えを信ずることによつて功德をいただいて成仏を期する修行。

むのとは、拜むという行為に含まれる意味がまったく違いますね。

大平 違うと思います。

株橋 キリスト教とかイスラム教には、修行というニュアンスが当たらないと言えますね。

大平 キリスト教などでは「修行」ということではないのではありませんか。仏教的な考えですと、ダルマと一体となるための修行が必要で、他力と自力の違いが言われたりしますが、ある程度修行の部分は存在します。ひろさちや氏が言っていることですが、よく知られた「信ぜよ、さらば救われん」という表現があります。これを日本人に言うのと、自分が信じたならば、仏や神が、「お前は信じているのか、ならば救ってやるよ」というような構造でしょう。しかし、キリスト教では「信じる」ということ自体が神によって決められている。だから救われない人もすでに決まっているんだと解釈します。ここに、仏教とキリスト教の「信」についての基本的な相違点があると思います。だから「礼拝」というものについても、仏教に言う仏・菩薩に近づくというイメージは全然ないんじゃないかなと考えます。

株橋 そうするとキリスト教で日曜ごとに教会に行くのと、我々仏教徒

がお寺にお参りに行くというのでは、礼拝行為は同じでも全然意味が違うと。

太平 違うんですね。

株橋 キリスト教では神との約束、神の「被造物」という考えのもと、神の掟おきてを守っているんだというその確認が教会での礼拝にあるんでしょね。

太平 そういうことです。非常に極端に言えば、聖書に書かれていることは守らないといけない、書かれていないことは神との契約以外のことだから、何をやっても構わないということになります。これは笑い話ですが、『**荒野の決闘**』という映画での一シーンで、新しい教会の棟上げで信者さんたちが集まってお祝いをするんだけど、主催者の男が「自分は何遍も聖書を読んだけど、歌ったり踊ったりしてはいけないとは書いていないから大いにやろう」とか言う。そういう発想も生まれてくるわけです。

株橋 イスラム教の礼拝の場合も、我々の「拝む」というのとまったく違うように感じます。神の子であるということが大問題でありますよね。神の子である条件は、神の掟を守っているという、まさしく契約で

荒野の決闘 ジョン・フォード監督作品、ワイアット・アープを演じるヘンリー・フォード主演の西部劇映画。荒野に生きる男たちの生きざまと哀歓を詩情豊かに描く不朽の名作。

すから。そして、その契約を破棄したときには神の敵となる。

大平 敵というか、もう救済を破棄されたことになります。

株橋 単なる信仰心というよりも一種の恫喝どっかつのような感じで、「信仰やめますか？ それとも人間やめますか？」みたいなところまでいっていいような気がします。

大平 そうですね。

—— そういう信仰形態は、日本人の宗教観にそぐわないですね。

大平 合わないです。日本人ですと、*おんしんまうろう怨親平等などと言うわけですから。

日本人は無信仰の民族ではない

—— この信仰形態から、「日本人は無信仰だ」と表現するのはおかしい話ですね。

大平 おかしな話。私が法話の時にいつも話すことですが、新聞あるいはテレビで信仰についての調査をよく目にします。その結果は一樣に、「日本人は西洋人に比べて信仰心が薄い」と。加えて「正月にはお寺や神社に初参り、お盆にはお寺に墓参り。実に不思議な民族だ」というコ

怨親平等 敵・味方の差別なく、
絶対平等の慈悲の心で接すること。

メントなんです。だけどそれは、西洋的な宗教観・信仰観というものを日本人に当てはめているだけであって、日本人は特に中世以来は先祖供養ということを中心に信仰心を高め深めていった、そういう信仰形態であると思います。何も不思議なことはない。不思議という考え方は、明らかに西洋的な、いわゆるキリスト教を中心にした体系の宗教学を基準として日本に当てはめた見方であって、決して日本人に信仰心がないわけではありません、と言っているのです。

株橋 日本人の宗教心、仏教的信仰心と言いかえてもいいですが、それを支えてきたものは先祖供養といえますが、本尊の問題との関連から考えますと、信仰の対象は本尊ではなく先祖といえる風潮も感じられます。そんな中で日蓮大聖人が本尊に着目されたことは、本尊を拝むことによつて先祖供養も成就していくんだとおっしゃりたかったのだと思います。大平 それはあると思います。要するに「仏法は体たいのごとし、世間は影のごとし」(『諸経与法華経難易事』)という、その「体」をはっきりとお示しになる。その「体」を、具体的な本尊というようなもので明示しないと一般的には分かりにくい。だから、目連尊者もくれんそんじやが法華経を信心したから両親も成仏したのであると、先祖供養の精神風土を本来の信心のそこ

目連尊者 目連(目健連・もっけんれん)とも言う。仏の十大弟子の一人。神通第一と言われる。地獄に苦しむ母をお題目を唱えることで地獄から救い出した。

ろへもってゆかれるわけです。

株橋 本尊の示し方が具体的であればあるほど、拝む側は意識・知識がなくてもこれでいいんだというふうに自然に手を合わせる。そういう面は大いにあると思うんですけども。

大平 中国、唐代の妙樂大師は「発心はつしんが真実でなくても、正しいご本尊に向かえば功德が多い。もし、ご本尊が正しくなければ、拝む心が真実であっても仏種とならない」という意味のことを言われています。はっきりしたもの、つまり唯一これでないといけないというものを示すことによって、拝む意識を高揚させたという一面はあると思います。それによって、色んな雑多な信仰というものを本来の意味の信心に導いていく意図を、日蓮大聖人はお持ちだったと言えるのではないかと思いますね。

日本仏教（浄土系）と日蓮大聖人の本尊観の相違

株橋 ところで、浄土系の本尊観と日蓮大聖人の本尊観との違いは具体的にどのあたりでしょうか。

大平 そうですね。浄土系の本尊は結局は阿弥陀さんの本願力に頼ろう

妙樂大師（七一―七八二）
湛然（たんねん）・荆溪尊者（けいけいそんじや）とも言う。天台三大部の註釈は現在まで最も重視される。日蓮大聖人の御遺文の中にも多く引用される。

ということ、それに対して日蓮大聖人は南無妙法蓮華經というものの、
経力きょうりきというものを説かれました。その中にはもちろん仏力・菩薩力な
どを含めての経力であっても、浄土系とは頼り方が違うということです。
このことは、お題目は仏種子だという考え方からもよく分かります。弥
陀の救済とか積尊の救済とか、向こう側の救済に頼るだけでなく、成仏
の原因となる具体的なものをいただくんだと説かれるわけです。その具
体的なものが南無妙法蓮華經。だから、南無妙法蓮華經は本尊の対象と
もなるし、唱えれば成仏の種子ともなるのです。まさに「三大秘法」な
のです。ここが浄土系との違いだと思います。

南無妙法蓮華經と唱えて聞かす

株橋 今、「三大秘法」という言葉が出ました。「一大秘法」「三大秘法」
についてやさしく話をするというのは非常に難しいかと思うのですが、
*
信行の立場により「一大秘法」を具体化したものが「三大秘法」である
と解釈してよろしいのでしょうか。

太平 そうのことだと思います。要するにお題目は、日蓮大聖人から
我々に代々伝わってきたわけですね。もっともお題目とは、本仏が最初

三大秘法 本門の本尊・本門の戒
壇・本門の題目のこと。

信行 教えを信じることによって
成仏を期する修行、修行観。

に唱えられた信行の根本と理解しますので、原点は久遠本時*くおんほんじに還るわけですが、現実の日本の歴史の上では日蓮大聖人が最初、つまり上行応化*じょうぎょうおうの人である日蓮大聖人が末法の我々に下された。お題目を修行するとは、「聞いて唱えて、唱えて聞かす」これに尽きるわけです。要するに、南無妙法蓮華経を聞いて、それを受けて南無妙法蓮華経と唱える場面を考えると、唱えている場が「道場」であり、唱えるということは同時に自分と一体となることと言えます。ただ唱えているということは信仰の対象とすることですから、「本尊」となります。そして、口に南無妙法蓮華経と唱えるわけですから、道法としての「題目」となります。そういうふうな、自分がお題目を聞いて唱えている信仰の場というものを考えた時に、自然な形で「三大秘法」というのが出てくるんじゃないかと思います。

株橋 なるほど、非常に現実的なんですね。

太平 そう現実的です。だから「一大秘法」は「教法」であって、「三大秘法」は「行法」だというように教学上では規定します。非常に素直にお題目をいただいて自分が一言でも唱えてみたら、それが「三大秘法」の姿だと言えるんじゃないかと。

久遠本時 本仏釈尊が五百億塵点の昔に、南無妙法蓮華経のお題目を唱え自ら成仏し、他に下種された時のこと。

上行応化 法華経本門八品において、本仏釈尊からお題目の弘通を付嘱される地涌の菩薩たちの筆頭が上行菩薩である。その上行菩薩が、末法という悪世に生きる我々衆生を救うために、人界に日蓮大聖人となって現れ下種せられた。

株橋 まさしくその通りですね。非常にすごいことだと思います。法華宗の本尊とは、自分の外側に存在していると考えただけでなく、客観的なものと自分の心の中が一体化してくるのですね。

大平 本来ひとつのものであり、また別なものである。難しい表現ですが、そういうことでしょう。本仏釈尊ご自身が南無妙法蓮華経で成道された、その南無妙法蓮華経を、今度は釈尊がみんなに唱えさせるという構造ですよ。だから、拜む対象であると同時にまた自分がある中にある。そういうものが法華宗の本尊であると言えるのではないのでしょうか。

法華宗と日蓮宗の本尊の違い

大平 日蓮宗（一致派）の教学の指導的立場にある立正大学では、釈尊を本尊とする考え方です。先ほども問題になったように、常識的には本尊とは仏・菩薩という具体的な尊像を拜むこととして理解されています。それは、我々の心情として具体的な像を拜むことが受け入れられやすいところにあると思います。この点について、日隆聖人も『私新抄』のなかで、「我々のご本尊は南無妙法蓮華経であり、その脇士が釈迦・多宝等である。その報身釈尊は、色・形ある姿で本尊をお飾りする。仏滅

一致派 現在の日蓮宗では、法華経の本門と迹門との位置づけを考える上で、本迹一致義を標榜する故に一致派と呼ばれる。

私新抄 日隆聖人初期の著述。十三卷からなる。日像聖人の教えや、日存・日道両聖人の研究された成果をもとにして、日蓮大聖人の教えの基本的考え方を体系的にまとめた書物。

多宝 多宝如来の略。東方の宝浄世界にいらっしゃるという仏。釈尊が法華経を説いた時、空中に塔が現れ、その塔中において釈尊を讃嘆し、半座を分けたという仏。多宝仏。

報身 仏の三身の一つ。三身とは法身・報身・応身のこと。一仏について三方面より観察したもので、三身は一体の仏に具足する。報身は修因感果（実際に修行をし、その報果として悟りを開くこと）の仏であることが特徴。法華経寿量品に示された仏身は、三身を具し

後の三宝は、[＊]絵像・木像とするのがふつうであるから、なおさらちょうどよい」と言われていますが。これは人間の心情をもふまえて述べられたわけです。ともかく日蓮宗では、南無妙法蓮華經を本尊の正体とはせず

釈尊を本尊とするというので、曼荼羅との関係が問題となり、立正大学の先生のなかでも、わざわざ本尊を「本門の本尊」と「観心の本尊」と分けたりして、それで釈尊と四菩薩[＊]の一尊四土本尊と曼荼羅との違いを述べられていることもあります。しかし、御遺文を虚心坦懐^{きょしんたんかい}に拝見すれば、本尊は南無妙法蓮華經であるというところに自然に落ち着きます。

周知のように、御遺文のなかには釈尊を本尊とする解釈も見受けられますが、御遺文を正直に拝読すれば、やはり南無妙法蓮華經が第一義の本尊であって、それに対して釈尊は、あくまで第二義的本尊であると法華宗では理解しています。

株橋 釈尊のみを本尊と規定すれば、阿弥陀仏などを本尊とする他宗の本尊義と同じ次元です。これでは先に論じた本尊観と離反してきます。

大平 法華經が、釈尊と私共との深い関係を述べているのは事実です。しかし、日蓮大聖人は釈尊をこの上なく尊まれながら、南無妙法蓮華經が本尊の正体であると説明されています。

つつも、この報身の側面が強調されている。

三宝 仏・法・僧のこと。法華宗では塔中南無妙法蓮華經（法宝）、釈迦如来・多宝如来（仏宝）、上行菩薩・日蓮大菩薩（僧宝）を言う。ただし、一般的にお木像では、宝塔と釈迦如来・多宝如来の坐像を三宝尊と呼んでいる。

四菩薩 法華經本門八品に顕れる地涌の菩薩集団のリーダー。上行、無辺行、淨行、安立行の四菩薩のこと。

株橋 この点を問題とする時、「法華經のどこを読んだら南無妙法蓮華經を本尊とすることが出てくるのか」という質問をよく耳にします。確かに成語としては出てきません。先生はこの質問にどう答えられますか。太平 『法華經』というお経は、日蓮大聖人がそうであられたように、そのなかに飛び込んでいくところに『法華經』の世界がある。それが「法華經を生きる」ということになるのです。『法華經』のなかに飛び込むということは、『法華經』全体に「南無」する、これが南無妙法蓮華經の意味だと思います。だからこそ日蓮大聖人は、五字七字の題目は単なる経題ではなく、「所詮なり、体なり、心なり」（『曾谷殿御返事』）と言われるわけでしょう。繰り返すようですが、『法華經』（厳密には本門の法華經）全体に「南無する」「帰依する」ということになれば、これは南無妙法蓮華經としか言いようがない。それを自ら要請しているお経が『法華經』。だから、南無妙法蓮華經という成語が『法華經』内にならからおかしいとする議論は、『法華經』の内容解釈が正当でないとと言えるのではないだろうか。

株橋 確かに『法華經』が要請しているのはそういうことですよね。長い法華教学史のなかで、『法華經』を主体的に把握しようとされたのは、

唯一日蓮大聖人だけといえます。

大平 「法華經の行者日蓮」という宗祖のお言葉が象徴しています。『法華經』というお經に向かう時、古典として読むとか、文学として読むとか、いろんな読み方ができると思います。『法華經』と自分との間に距離をおいて古典を読む、また文学作品を読む、いわゆる「教養」として読むということであれば、「ここに南無妙法蓮華經を唱えなさいとあるから唱えるんだ」ということになります。しかし、日蓮大聖人が「法華經は日蓮一人のためだ」とご自分の「生死」をかけて『法華經』に向かった場合、それはもうギリギリのところまで「南無妙法蓮華經」と言うしかないと思います。つまり、南無妙法蓮華經とは「我々が生きている事実そのままだ」と言えます。日蓮大聖人は『法華經』を身読された。これを逆に言うと、「南無妙法蓮華經」それしか言いようがないということになりませんか。

大曼荼羅の世界

株橋 その世界を文字化されたのが大曼荼羅ですね。まさに日蓮大聖人が感得された信仰そのものといえますね。

大平 同感です。

株橋 その大曼荼羅本尊で疑問に思っていたことですが、弘安式こうあんしきになってくると、「四天王」の配列が変わってきます。その理由として諸説がありますが、先生はどうお考えでしょうか。

大平 そのことについての日蓮大聖人の具体的なお示しは、何もないですね。何か深いお考えによってそのように表現されただろうと、私は受け止めることとしています。後世の人は色んなことを言っていますけれど。

株橋 大曼荼羅の中央にある南無妙法蓮華經の字体についても、古来より諸説が存在しています。

大平 室町時代頃には、大曼荼羅について言い伝えをまとめた文献が色々作られました。その成立の背景には、大曼荼羅を見た人たちが自分自身の疑問を解決しようとして色々考えた末に、「こうじゃないか」という想像が「こうであった」という説になってしまったんでしょう。しながら現実には、日蓮大聖人ご自身はその理由をお示しになっておられない。宗祖の確実なお示しが存在していれば別ですが、そうでない場合は、凡夫としては「分からないことは分からない」でいいんじゃない

四天王 四天王とも言う。弘法守護の善神で、東方の持国天王・南方の増長天王・西方の広目天王・北方の毘沙門天王（多聞天王）のこと。

いかなと思いますね。宗祖ご自身に何か深い意味があったとの推測は可能でも、我々凡夫のあさはかな計らいで勝手に「こうであったに違いない」と断定することは、私は慎むべきことだと思います。確かにいろいろ疑問があることは事実ですけどね。以前、大隆寺様に学林があった時のことです。株橋日涌上人がお曼荼羅をお書きになるのを手伝っていたある学生が、突然「本門八品のお題目だから、長くのばすところが八本あるんだ」と興奮して言うんです（爆笑）。本人にとっては、すごい発見だったんですね。でも、他の人に主張できる客観的根拠はまったくない。そういうことが信心の世界には色々あって、難しいですね（笑）。

株橋 先ほど先生がおっしゃったように、『法華経』の要請しているものが「南無妙法蓮華経」としか表現できないという世界は、「流動的な世界、動いているもの」だととらえていいわけですね。それを文字で表現するには、「止まったかたち」でしか表現できない。つまり、「一瞬」の世界。

大平 その「一瞬」ってのは「今」なんでしょうね。「今本時の娑婆世界は……」と言うあの「今」ということなんだろうと思います。大曼荼羅とは、日蓮大聖人が『法華経』を、特に「本門八品」の世界を感得さ

れたということには間違いないと思います。そして、すべての諸尊が南無妙法蓮華經と関連している世界を表そうとされた、との想像は許されると思います。『本尊抄』の「塔中妙法蓮華經、左右に釈迦牟尼仏・多宝仏」、あるいは『報恩抄』でも、「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とあって、そのあとすぐに「所謂宝塔の内の釈迦・多宝」と述べられていることを考えれば、単に釈尊のみが本尊ではなくて、そこには南無妙法蓮華經というものに包まれた釈尊、あるいは諸尊・十界の聖衆という関連づけがあるのではないでしょう。南無妙法蓮華經を本尊として拝むということは、具体的には日蓮大聖人がお示しになった大曼荼羅を前にして、日常の勤行ごんぎょうをすることと同時に、日々の生活において南無妙法蓮華經と常に離れずに生活していくことじゃないかと思います。つまり、寺院のご宝前で考えてみると、諸仏が勧請かんじようされたご宝前すべてが南無妙法蓮華經となるのです。

南無に南無する

株橋 なるほど。『法華經』が南無妙法蓮華經を要請し、それに帰依するという法華宗の教えは、先のお話にあった仏教本来の姿であると言え

十界の聖衆 日蓮大聖人がお曼荼羅に名前を書かれている十法界（仏・菩薩・緣覺・声聞・天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄の十界）を代表する仏・菩薩・諸天善神の方々のこと。

ますね。

大平 『法華経』というものが、仏教の本来のあり方を示しているんじゃないかと思うんです。最初に言ったインドの釈尊の最期の説法は、まず自灯明「最期の抛り所は自分自身だ」と。「自分自身」は結局は「無常」。だから、最終的には「法（ダルマ）」なんだということで「法灯明」という。これが「南無妙法蓮華経」の朽木書（素描、先表）であると思うのです。もっとも、平川彰先生は「あれ（法灯明の説）は、出家者に対して説かれたんであって、在家者は仏に帰依するだけだ」と、ある本に述べられていました。しかしその場合でも、最終的には「法」を抛り所とするところに至るわけだから。

株橋 やはり「釈尊本尊」という考え方では、この仏教の基本理念が表現できない。

大平 そうです。釈尊ご自身も「南無法」「南無妙法」なんですよ。「法」なんですよ。

株橋 私は師父から常々、「南無・南無妙法蓮華経だ。その南無妙法蓮華経というのは、釈尊の唱えられたものである。また日蓮大聖人の信行されたものである」と聞かされていました。ずいぶん後になって、大平

先生から講義を受けた時、同じように「南無妙法蓮華經に南無するんだ」と熱弁を奮われたので、強烈な印象があります。

南無妙法蓮華經はありがたいもの

株橋　今までのお話を聞いてきまして、法華宗の本尊が南無妙法蓮華經であることは、末法の衆生である我々にとって非常に「ありがたい」と、改めて確認できました。南無妙法蓮華經とは言葉の教えですから、必ずしも漢字で記す必要性はなく、「唱えるだけでいい」「聞くだけでいい」というところに、他宗の本尊とまったく相違していると受け取りました。

大平　そうですね。先ほど言った「仏種」という考え方が大切です。ただ単に「仰いで助けていただく」のみではなくて、南無妙法蓮華經をいただいたて、それが本尊であるのと同時に「仏種」だと、成仏を必ず約束するものだ、そういうところに法華宗の本尊の「ありがたさ」が生まれてくるのだと思います。

株橋　その信行の姿が、まさしく菩薩行を実践していることになりますか。

大平　そうですね。思想的な面から言えば、『法華經』の教えは、「誰も

が本来菩薩である」と。だから、他の人に「あなたも菩薩である」と自覚してもらいたい。南無妙法蓮華經を唱えて聞かすということは、その自覚をうながす要因となりますから、菩薩行を實踐していることになります。

株橋 南無妙法蓮華經を唱え、聞かすことが菩薩行とは、老若男女を問わずにできる簡単な修行ですね。

大平 そういう意味では易行いぎようといえます。日蓮大聖人のお言葉にもそうあります。

株橋 易行であるんですから、もっともっと弘まってはしい教えですね。

お題目に生きる

大平 「お題目」の力、「お題目」の信心をいただくというところを、もっと追求していかなくてはと思っています。そういう意味において、僧侶の役目は、水をかぶる苦行とか難行とかを信者に見せるのではなく、「お題目」をいただいて、現実の社会のなかでいかに生きているか、その姿を示すことだと思っています。それと同時に、私が最近あちこちで言っ

ているのは、世間一般では「お題目」という言葉がほんとうの意味ではなくて、たとえば、「政治家の政治改革なんてお題目にすぎない」なんて使い方をする。法華宗からいえば非常に不愉快な表現です。こういう悪用法はぜひともやめてもらいたい。

太平 お題目のすばらしさを一人でも多くの人に知ってもらうことが、我々法華宗僧侶・信徒の第一の使命だと思うけれども、同時にまたお題目をいただいた我々が、自分の実際の生活の中で、社会の人々に「なるほど法華宗のお題目の信心をいただいている人はすばらしい」と認められる生活を送ることが大切なのではないでしょうか。有名人が亡くなる時、よく「敬虔なクリスチャンだった」という記事を目にします。ところが仏教信者がそう書かれたことはあまりない。仏教者の方が圧倒的に多いと思うのです。「あの人は立派な仕事をした」、あるいは「社会のために大きな功績を遺した」、よく聞いてみたら、「法華宗の信者」「真摯な法華信者であった」とかの記事が載りませんね。そういう人たちが増えてくるこそ、ほんとうのお題目のありがたさを知らしめる「ちから」になると思っています。開宗七百五十年に向かっての法華宗のスローガンは、お題目の「総下種」です。唱えていない人に一人でも多く

唱えてもらう、これはやらなきゃならないことですが、同時にお題目を
いただいている者は、常に今の自分に「これでいいのか」という反省の
念をもって生きる。その姿に、「あんな立派な人が法華の信者にいたの
か」、そんな言葉をかけてもらえる人が増えることも大事なことでしょ
う。私自身はまったくダメな人間で、人さまに偉そうなことを言える立
場ではありませんが、世間には「真摯な法華者」はたくさんいらっしゃる
と思うのです。ともかく、自分自身で改めて「法華者」であることを
自覚して生きる。私は、そこから始めたいと思っています。